

『動物園へカジャ！』

山下 昌子

と言つたものの、太陽がギラつく暑い夏に韓国の動物園に行くチカラは、早朝ラジオ体操で鍛えたこの体とはいえ、残念ながらない。

しかし、そんな消極的な気分になる私をも惹きつける魅力的な動物園が今年の4月22日にソウルに再び現れたというニュースを聞いた。

ソウル近郊の京畿道果川市にあるソウルランド、国立現代美術館、動物園を含む大型レジャー施設であるソウル大公園（서울대공원：1984年5月開園）が今年で25周年をむかえるのと同時に園内にある動物園も歴史的に100周年をむかえるという記念の年であるので、ソウル市は、ソウル大公園の動物園をソウル動物園（서울동물원）Seoul Zooに改名して、ニューヨークの“Bronx Zoo”シドニーの“Taronga Zoo”モスクワの“Moscow Zoo”にならぶ大都市の象徴的動物園としてブランド化し、国内最大規模の“ソウル動物園（Seoul Zoo）”に育てる計画を発表した。まず2009年の“ソウル動物園訪問の年”宣言、国際的な動物園としてのブランドイメージ作業として身近な韓国情緒を入れた虎モチーフで制作された動物園のロゴマークによってソウル市民はもちろんのこと外国人観光客らにも愛される動物園に育てるというソウル市の計画である。



(オレンジ色のソウル動物園シンボルマーク)

ソウル動物園はリニューアルは清渓川復元工事等の都市計画事業を行っているソウル都市施設管理公団の関連事業であるが、実際ソウルに住む人にソウルの動物園のイメージについてたずねてみると、夏なので涼を求めるせいか、カリブ海をテーマにした世界最大規模(11万9千m²)の室内外ウォーターパークのカリビアンベイがあるエバーランド（この発音では全く通じない正しくはエボレンドゥエバラン：1976年4月開園/サムソン・グル

ープ経営 <http://www.everland.com/>）を思い浮かべ、そこにあるサファリパークのような体験型動物園の話をする。京畿道龍仁市のエバーランドではないと言うと次に出てくる動物園は施設が陳腐化しているレトロなソウル市広津区にあるオリニ大公園（어린이대공원：1973年5月開園/ソウル市施設管理公団運営）で地元人でも馴染みがないのかソウルランドまでなかなか辿りつかない。そう言う私も何度もソウルに行っていながらも関わらず、このソウル大公園の動物園の存在も今まで知らなかつたが、安聖基が出演していたラブロマンス映画“美術館の隣の動物園”（미술관 옆 동물원：1998年）の舞台がソウルランドの国立現代美術館と動物園であるのを知らずに見ていたのである。

しかも、動物園について調べていく内にこのソウル大公園内の動物園が関西に住む私達に意外と身近であるのがわかつてきた。

2003年4月7日に宝塚ファミリーランドが全面終了になったのは周知の通りだが、ファミリーランドで飼育されていた動物達の移転先として韓国のソウル大公園が決定されていたというのは余程の動物マニアでない限り気にとめないだろう。

阪急電鉄会社の広報（2003年3月18日発行）によれば“宝塚ファミリーランド閉鎖に伴う動物移転について”という見出しで始まる同園内で飼育していた動物達の移転先について次のように書かれている。

1. 主な動物の移転先は
アジア象 ソウル大公園

2. 韓国ソウル大公園への動物移転について
昨年夏、韓国ソウル大公園より、動物の繁殖と展示充実を目的にアジアゾウ（象の名前：サクラ）をはじめとする動物を譲り受けたいとの要請をいただきました。

これを受け、現地の飼育環境の視察した上で同園と協議を進めてまいりましたが、このほど、日本と韓国の友好・親善を目的として、以下の7種26点の動物を同園へ移転することとなりました。

なお、同園への移転に関しましては、現在、

経済産業省に対して輸出に関する許可・承認申請を行っているところであり、輸出許可・承認をいただいた後に移転の予定です。

3. 韓国ソウル大公園へ移転予定の動物

アジアゾウ(1頭)、アライグマ(12頭)、インドオオコウモリ(4匹)、ポニー(3頭)、プレーリードッグ(4匹)、カンムリヅル(1羽)、ルリコンゴウインコ(1羽)

4. 韓国ソウル大公園の概要について

動物園・植物園・ソウルランド(遊園地)・

美術館などを含む韓国最大のテーマパーク

- ・開園：1984年5月

- ・入園者数：約661万人 内、

動物園 約300万人 (2001年度)

- ・面積：約667万m² 内、動物園 約20万m²

- ・経営：ソウル市(美術館は国営、

ソウルランドの運営は民間委託』

2003年5月20日に大阪南港からフェリーで動物達は出発したが、この宝塚ファミリーランドの象のサクラ移転の経緯と日韓関係について、京都都在住の在日三世のキム・ファンさんの『”サクラ”－日本から韓国に渡ったゾウたちの物語－』(2007年 学研) 児童書に詳しく書かれている。



サクラ

サクラの繁殖による日韓交流感動物語もできそうだが当時、1965年生まれのサクラが渡韓した年齢は38歳(去年王子動物園の諏訪子65歳で亡くなった。象の最高齢は74歳だそうだ)。現在は44歳なので当のサクラちゃんとってもその期待は厳しいものがある。

ソウル動物園の人気者の第1位はソウルオリンピックのマスコット”ホドリ”を父にもつ朝鮮虎のソウルオリンピック88に誕生した白頭(ペクトゥ)、第2位がオラウンターのボミ、3位がアジア象のサクラである。

(<http://grandpark.seoul.go.kr/>)

ところで開園25年のソウル大公園の中にある動物園が開園100周年目というのは計算間違いではないかと思ったりもするが、1909年の植民地時代に日本によって昌慶苑(昌慶宮)作られた動植物園から1984年にソウル大公園に移ってからも現在までこの名称を維持してきたということで今年が100周年目というのである。この昌慶宮からソウル動物園までの歴史を記念して、ソウル動物園内で展示された珍しい写真が見られるサイトがあるので紹介をしておく。

<http://blog.naver.com/PostView.nhn?blogId=haneuljiki&logNo=90043648688>

韓国の動物園の始まりが日本植民地時代なら、日本の近代動物園の成立についてはどうだったのか調べてみることにした。

近代動物園の始まりは単なる見世物小屋ではなく教育・研究目的の社会施設として生きたままの動物を収蔵する博物館として、1873年江戸の島津藩邸跡等の敷地16,935坪に、6棟の陳列場、動物飼養所・熊室・動物細工所(剥製などを作製)、植物分科園・植物寒中置場等の施設を擁する山下門内博物館を開設した。上野動物園100年史によれば当時の飼育動物は猿、猫、山猫、狐、犬、熊、狸、オットセイ、野猪、鹿、水牛、モモンガ、ヤマ子、仏種兎、熟兎、鶴、シマトビ、シマミミズク、白鳥、九官鳥、雉、孔雀、ミソサザイ(雀)、亀、山椒魚、蜜蜂、蝸牛、他に家畜等、合計30種70点の動物であった。動物飼養所は70坪(231m²)の規模であったというから動物は檻に詰め状態である。(博物館の入館料は2銭)、その後、新しい文明の成果や外国文化を人々に伝える啓蒙的な役割を果たす内国勧業博覧会ブームにより博物館の付属動物園として恩賜上野動物園(通称、上野動物園 1882年開園)、次に京都市動物園(通称、岡崎動物園 1903年開園)が建設された。外国産の動物展示により多く人気を集めることで、次第に遊園地の一種として見なされるようになった。明治末期以降には、遊園地や動物園の盛況ぶりに着目した電鉄資本が競って沿線の顧客開拓の一環として子供や家族をターゲットとし遊園地や動物園が一体化した大衆娯楽的な行楽施設を各地に開設していった。(続く)